

ル
福島県
ポ

裏磐梯の古民家で至福の時を過ごす

湖のほとりに佇む古民家

岩佐哲次さん(63歳)が春から秋までの3シーズンを過ごす福島県北塩原村、いわゆる裏磐梯の古民家2階には、わずか3畳ほどの書齋がある。まさに「男の隠れ家」といった趣の書齋には、古民家に手を入れるにあたって、2つの窓を新しく開けた。座椅子にどっかり腰を下ろすと、正面の窓からは、すぐ近くの松原湖を、背面の窓からは、表を通る街道の先に中景の山を望む。

建具の一部はすでに金属製のものに取り替え済みだが、土間をはじめ、囲炉裏を切った板の間や畳の間、室内の建具には、古民家ならではの魅力があふれる。

1階では、手伝いの女性一人をパートで雇って、11時から売り切れまでそば屋を営む。屋号は、「蕎麦古屋(そばこや)」。地元産のそば粉十割の、つなぎを用いない手打ち麺が売り物だ。開店前には、1日20〜30食分のそばを自ら打って、準備を整える。冬を過ごす千葉県茂原市内の自宅敷地内には、そば打ちの小屋を建てたほどの趣味人。開店にあたっては、福島県喜多方市内の70才になる旧来の友達であるそば職人から指導を受けた。

冬場は千葉で暮らす

この日は、平日にしては客の入りはまずまずなのか、用意した20食分のそばはほとんどはけていく。岩佐さんは作務衣姿で、調理場と客を迎え入れる囲炉裏の間とを行ったり来たり。囲炉裏の周りでそばを食べてもらって、会話を楽しみなが、いい時間を過ごしてもらう——それが、岩佐さんの願いでもある。

商売に没頭しているわけではない。地元産のそば粉は仕入れが限られていることもあって、そば屋の営業日は年間125〜130日。休業日にはなにをして過ごすのかを問うと、「イワナ釣りや山菜採りです」と、悠々自適の様子。若いころから山好きで、名刺に「おやじ親爺」を名乗る岩佐さんにとって、近くの山で過ごす時間はなににより、のようだ。

至福の時を過ごせるとはいえ、11月半ばになるとこの地を離れて、千葉で暮らす家族のもとに愛車を駆る。「自分の力で建てて、3人の子どもが育った家だけに、愛着がありますから」と岩佐さん。月に一度、除雪作業などに戻るものは千葉で過ごす。



「最初はどうな人なのか気になりましたが、その人柄にふれ、いまでは会話に笑いが絶えません」と佐藤さん(左)



古民家のそばに広がる松原湖。冬は氷結した湖上でワカサギ釣りが楽しめる



2階にある3畳ほどの書齋。好きなものに囲まれながら景色を楽しむ、とっておきの空間だ





決め手はインスピレーション

岩佐さんが裏磐梯のこの古民家を購入したのは、10年ほど前、53歳の時。さかのぼること6年ほど前から、釣り用のベースキャンプにしようと、もともとあこがれていた古民家を探していた。

会津在住の知人からの紹介でこの古民家に出会った。6年間にわたって探し続けてきた経験が下地となったのか、決め手はインスピレーションだったという。

快適に過ごせるように、そして自分流のものになるように、購入した古民家にはプロの力も借りつつ手を入れていった。そして、57歳の時、転機を迎える。

当時、駅ビル管理運営会社で役員を務めていた。「ここが潮時」とばかりに、定年を前に長いサラリーマン生活に別れを告げ、ひと足早くに会社を辞めて、第2の人

生を裏磐梯の自然に囲まれて過ごすことを決めた。

地域活性化のきっかけに

当初は、自然の中で遊んで過ごしていた。そのうち、人との出会いを求めて、なにかを起業しようと思いつく。4年前、近所の人にも薦められた、そば屋の開業に踏み切った。道楽とはいえ、そば打ちの経験があった。一般には知られていないが、北塩原村では昔から良質のそば粉が作られていた。しかし、その量は少なくすべて自家用で食すのみだった。その存在を知った岩佐さんは当初、そうしたそば粉を分けてもらって打っていた。ところが、次第にそばの人氣が出てきたことから、地元では2年前、組合組織を立ち上げて、休耕地をそば畑に生まれ変わらせる取り組みにまで手を着けるよう

になった。そば粉はいま、複数の農家から直接仕入れる。

地元で立ち上げた組合とは、桧原遊休農地解消組合。理事長は、岩佐さん宅の隣に住む佐藤正義さんが務める。佐藤さんは岩佐さんに対する地元の反応をこう明かす。

「古民家にどんな人がやって来るのか、私たちとしては気になっていました。結果としてはいい人で良かった。ここで商売してもらうのは、大歓迎です」と、受け入れに迷いはない。「私たちにとっては、生まれた時からあるありふれた食べ物でそれほど思い入れはなかったのですが、岩佐さんの打つそばが大人気になったことで、私たちのそば粉がこんなに評価されるんだ、ということに改めて気付いたんです」。

岩佐さんがこの地で過ごすようになったことは、地域の活性化にも結び付きつつある。

同じように二地域居住を始めてみたいという人に向けて、岩佐さんはこうアドバイスする。「心の豊かな生活を送るといふ理想を実現できるのが二地域居住です。戻る場所があるのだから、安心して踏み切りたいと思います。自分の世界や人とのつながりを大切に生きることに没頭するのが、成功の秘訣です。事前に緻密に考えすぎることなく、走りながら考えていきましよう」。



「奥裏磐梯・ひばら蕎麦粉」の銘柄で商品化されたそば粉。インターネットや新聞記事にも取り上げられ、注文が増えている。「奥裏磐梯」とは、檜原湖最奥のこの地の魅力を広めたいと岩佐さんが願いを込めて名付けたもの



千葉で現役として活躍していた頃の岩佐さん



お客さんとの会話を楽しむ岩佐さん。東京圏だけでなく、仙台や新潟からも日帰りして食べに訪れるそう



店の休業日には、イワナ釣りなどで自由な時間を満喫している

「ほっとする、ふくしま」に住んでみませんか？ 福島県

ふくしま・ふるさとUIターン

福島県には、二地域居住に興味を持つ方々のためのさまざまなアクセス方法があります。実際に現地で宿泊できるものから、東京や大阪にある窓口を利用する方法など、ニーズに合わせて選択できます。また、総合的なアクセス窓口としては、右記があります。

〒960-8670 福島市杉妻町2-16
 福島県 観光交流局 観光交流課
 TEL 024-521-7287 (直通) FAX 024-521-7888
<http://www.pref.fukushima.jp/fui/index.html>

1. ふくしま暮らし体験施設

福島県内には、二地域居住・UIターン希望者が現地での暮らしを体験できる生活体験施設が各地で整備されています。

廃校の校舎を再利用したもの、築100年余の古民家を改修したもの、コテージとして新築されたものなど、バリエーションに富んだ施設があります。

施設例

「奥会津 のんびり館」

町の中心部にある空き家(旧旅館)を、地元木材を使い改修した体験宿泊施設。二地域居住やUIターン希望者にのんびり過ごしてもらいながら、リフォームモデルとして見ていただく。

年中無休。1泊2日(2食)7,000円(基本料金)、体験料金1,000円～。



2. ふくしまファンクラブ

ふくしまファンクラブは、「福島が気になる」人のための登録制クラブ(会費無料)。

会員登録すると、会員証と白河ミニだるまが進呈され、福島のことや話題を満載した会報誌が年4回届きます。

また、様々なスタイルの福島県での滞在プランなどを提案したり、抽選によるおたのしみプレゼントなども。さらに、県内各地の協賛店で割引や特典などの会員サービスを受けることができます。



▲会員証

ミニだるま▶

3. ふくしまふるさと暮らし情報センター

ふくしまふるさと暮らし情報センターは、福島県がNPO法人ふるさと回帰支援センターに委託し開設している、定住・二地域居住に関する総合窓口です。

場所は、東銀座駅5番口からすぐ、歌舞伎座のそば七十七ビル3階、ふるさと暮らし情報センター内にあります。専門の相談員を置き、福島への定住・二地域居住を考えている方に、face to faceできめの細かい情報を提供しています。



相談受付	月曜日から土曜日まで 午前10時から午後6時まで (祝日及び8月13日～15日、12月29日～1月3日を除く)
連絡先	電話 03-3543-0333 FAX 03-3543-0346
住所	〒104-0061 東京都中央区銀座4-14-11七十七ビル3F NPOふるさと回帰支援センター「ふるさと暮らし情報センター」内

4. ふるさと暮らしセミナー

ふるさと暮らしセミナーは、福島県内の市町村担当者などが首都圏に出向き、市町村での暮らしぶりを紹介するセミナーです。

電話やメールではなかなか聞くことのできない生の話を聞くことができます。「現地に行きたくてもなかなか時間がなくて…」という人には、うってつけ。

今後の開催予定などは下記URLから。

<http://www.pref.fukushima.jp/fui/seminar.html>



写真は過去に開催されたセミナーの様子

地味だと言われる福島県ですが、近年変化が起りつつあります。田舎暮らし専門誌「田舎暮らしの本」読者アンケートでも住みたい県の上位に選ばれるようになりました。

自治体や様々なセクターの努力の結果とも言えますが、実は心強い応援団があります。首都圏とのアクセスの良さ、安定した地盤、土地の安さ、大らかな県民性など、私たちが普段、意識していないチャームポイントを、既に移住されている方々が口コミで伝えて下さっているのです。これはまさに、地元民である私たちに気付かせてくれた「福島再発見」で、県全体のイメージアップにも良い影響を与えてくれるものです。

今後も、定住、二地域居住をお考えの皆さんに、「住んでみて良かった」と思って頂けるように充実した受入体制を進めたいと考えております。

住んでみて良かった
 福島再発見



担当者から

福島県商工労働部
 観光交流局観光交流課
 主査 高橋 健